

連載：原点

「公立高校の教員になって」

生浜高等学校 吉本 宇太郎

「なんで公立高校を選んだの？」

いろいろな人によくこう聞かれました。私は中高一貫の私立の学校に通っていました。そしてその頃から、教員に限らず勉強を教える仕事に就きたいと考えていました。ただ、高校の時はなんとなく「きっと母校で教えることになるのかな。」と思っていました。しかし、あることをきっかけに私は公立高校で教えたいと思うようになりました。それは教育実習校での経験でした。

教育実習は母校で行うのが一般的ですが、私は母校ではない公立の中学校で教育実習を行うことになりました。母校で教育実習が出来なくなり親に相談したところ、親の知り合いに公立中学校の校長先生がいて、その中学校で教育実習を受け入れてもらえることになったのです。また教育実習だけでなく、大学卒業後もチューターとしてもその中学で1年半働かせてもらいました。

教育実習やチューターを通じて、自分が通っていた私立の中学とは全く違う中学校、クラス内で学力差があるだけでなく複雑な家庭環境を持った生徒などいろいろな生徒を見てきました。それと同時に一つの学校しか経験しなかった自分がいかに狭い視野しか持っていなかったかがわかりました。そしてチューターとして働き始めて半年が経った頃、いろいろな学校で様々な生徒に接することができる公立の高校の教員になりたいと強く思うようになりました。そして2年間の講師生活を経て、晴れて今年初任者として千葉市の生浜高校に勤務することになりました。

2年間の講師生活では全く違った高校を経験しました。講師1年目はいわゆる進学校、講師2年目は夜間定時制の高校でした。この2つの高校は、生徒の学力はもちろん、家庭環境など抱えている問題は全く違ったものでした。ただそんな正反対と思われる学校でも共通していたものが「数学が出来るようになりたい。」と思っている生徒が多くいたことです。そしてそれは、高校生の時に数学につまづいた私も持っていた感情でした。もちろん生浜高校の生徒も同じことを思っています。生浜高校に来てそろそろ半年が経ちますが、授業はまだまだ失敗の連続です。一回の授業を終えるたびに、「もっとわかりやすい授業が出来れば。」「もっとちゃんと教材研究をすればよかった。」と思っています。ただ、それでも授業を聞いてくれる生徒がいます。数学を頑張って勉強しようとする生徒もいます。そんな生徒のために、これからも数学科教員としての指導力を伸ばしていきたいと思います。そして私は生徒に伝えたい…「数学って面白い！」と。

「日々成長」

木更津東高等学校 高良 伊織

この原稿の依頼を受けた際「原点」をテーマにと聞き、頭に浮かんだのは、座標軸の交点である原点でした。話の流れから、教員としての原点ということは理解したものの、「数学」というものが私の生活の一部になりつつあるような気がして、笑みがこぼれそうになりました。

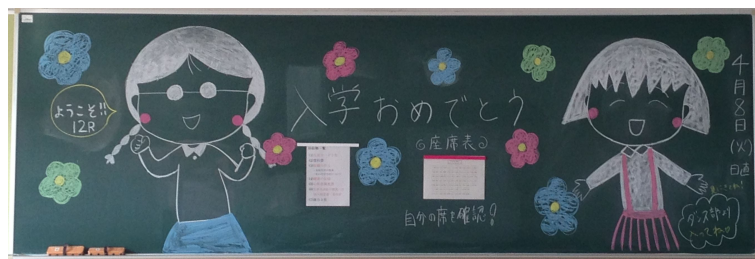
大学を卒業後、講師として木更津東高校へ赴任し、私の教員生活がスタートしました。女子校という未知の環境で、たくさんのことを多くの先生方に教えていただき、生徒にも助けられ、多忙ながらも充実した1年を過ごしました。

昨年に引き続き今年も、木更津東高校で勤務することができ、初任者という肩書きがある中で、1学年の担任になることもできました。

4月、入学式前日。私が顧問をしているダンス部の生徒たちが「担任デビュー」を祝し、HRクラスの黒板に、新入生へ向けイラスト付きのメッセージを描いてくれました。このとき、本当に多くの生徒にも支えられていることを実感し、嬉しく思いました。入学式当日。初めての呼名や保護者会で緊張したことを今でも覚えています。黒板のイラストにも支えられ、無事1学期初日を迎えることができました。入学式のことを生徒へ聞くと、「イラストが印象的すぎて他のことはあまり覚えていない。」とよく言われます。普段は、毎朝全員が遅刻せず出席しているだろうか、今日はどんな話が聞けるのだろうかかと、ワクワクしながら教室へ向かいます。教科指導や、たわいもない会話、将来について共に考える中で生徒の成長を実感できることに喜びを感じています。時折、壁に突き当たることもあります。多くの先生方からアドバイスをいただきながら、一歩ずつ確実に成長していきたいと思っています。

教科指導では、視覚的にも学べるような授業づくりを心掛け、日常生活との関連性を具体的に紹介していけるように、日々奮闘しています。基礎・基本となる内容が未定着な生徒もおり、苦勞するところもありますが、授業中の問題演習で、「できた・わかった」が次へつながる瞬間、すなわち、生徒が新しい問題を解いてみよう・友達に教えてあげようとする姿勢がうかがえたとき、やりがいを感じます。私が数学の教員を目指したきっかけは「高校生のときに数学の先生に憧れて」とありきたりな話ですが、この「原点」と生徒の成長への喜びや、多忙な日々の中で感じる充実感を糧に、私自身の人間性や専門性を高め、生徒のために全力を尽くせる教員になりたいと考えています。

最後に宣伝となってしまいますが、学校ホームページを昨年度から大幅にリニューアルし、更新しています。毎週更新を目標に、学校の様子などを掲載していますので、ぜひご覧ください。



七転び八起き

市原高等学校 高橋 一栄

私が教員を志したきっかけは中学校の部活動です。それまでスポーツ経験がなかった私にとって卓球部での日々はとても新鮮で、苦しい練習を乗り越えて関東選抜大会にチームで出場できたときのあの感動を今でも鮮明に覚えています。いつしか、私も部活動の顧問になり生徒を指導したいと考えるようになりました。これが教員になりたいという夢をもったきっかけです。

しかし、一人親家庭である私の家にとって大学進学は大きな壁でした。高校を卒業したら、社会人になって働いて欲しいというのが親の願いでした。それならせめて、大好きな卓球を思い切りやりたいという思いで私は高校に進学しました。そこで、出会ったのが恩師でした。

その先生は、私の夢と家庭の環境を知り、私に夢を諦めるなと話をしてくださいました。さらに、私の家庭の事情を踏まえて親と話をくださり、奨学金の手配や、大学進学のための補習等、沢山の支援をしてくださいました。「諦めていた夢に挑戦することが出来る」あの時の喜びを忘れることはありません。この恩師である先生のおかげで、私にとって教員になることは必ず叶えたい目標へと変わりました。

やっとの思いで大学を卒業した後も、なかなか教員採用試験に受からず、どうして良いか分からなくなることもありました。何度諦めようと思ったか分かりません。しかし、このチャンスを無駄にしたくないという一心で挑戦を続けてきました。

そして今、夢を叶えることができました。何度転んだって立ち上がって進み続ければいつか道は開くのだと感じています。

夢に挑戦させてくれた恩師には本当に感謝の気持ちで一杯です。これから私は、教師として恩師のように生徒の人生に深く関わる仕事をしていきます。私は、生徒に夢を諦めない人になって欲しいと思います。そのために、今の私ができることは自信を持つ大切さを伝えることです。今の勤務校である市原高校では、自分に自信のない生徒が多いと感じています。中学校時代から数学を苦手とし、解けない、分からない、を繰り返すと「俺はやっても無駄だから」と時には自分を否定してしまいます。本校の生徒の多くは、中学校の内容が十分に習得できていません。そのため、授業では生徒の分からない部分まで戻り、生徒のつまづく部分を一緒に確認しています。そのような生徒達に対して、授業の初めに中学校の内容の復習プリントをやるようにしています。すると、少しずつですが授業でも問題が解けるようになり、生徒から「嬉しい！俺でもできた！」といった言葉が聞けるようになり、私自身とても嬉しくなります。今の私の目標は、その生徒達の出来るところを増やしていくことで「少し数学好きになったかも！」や「俺もやればできる！」と自分に自信を持たせることです。自分を信じて、つまずいたとしても、起き上がってまた一歩進んで欲しいと願っています。

私自身もこれからたくさんつまづくことがあるかと思いますが、しかし恩師のような教員になれるよう、七転び八起きをいつまでも胸に刻み、これからも努力し続けていきたいと思っています。